様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 １１ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０４７７０

研究課題名（和文）英語科教育実習生の当事者研究

研究課題名（英文）Tojisya-kenkyu by and for Prospective Teachers of English

研究代表者
樫葉　みつ子（KASHIBA, MItsuko）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授

研究者番号：２０５８２２３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　困難な状況にいる人間が当事者として問題状況の客観視を図り、問題解決への端緒を見出そうとする「当事者研究」を、英語教員志望学生が実践できるように支援した。この実践は、英語科教員を目指す研究協力者にとって「コミュニケーションの学び直し」という成長をもたらした。
　関係性文化理論の観点からは、当事者研究は特定の関係性を文化として定着させた上でのコミュニケーションであり、弱さを力に変えることができることが明らかになった。このような結果から考案された当事者研究的な校内授業研究会を導入することで、校内のコミュニケーションが促進され、学校全体の教師の力量形成や同僚性に寄与すると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　様々な教育課題に取り組む当事者である英語科教員が、周りの人々とともに当該状況に向き合う人間としての権力を取り戻す当事者研究は、実践者による実践研究のあり方として、今後の学術研究のあり方に示唆を与えるものである。
　また、当事者研究での問題対処の仕方やコミュニケーションを学ぶことは、教員にとって入職時の適応や、その後の問題改善に役立つという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：　We helped students who want to become English teachers to practice "Tojisha-kenkyu" in which people in difficult situations try to objectively view the problem situation as a party and find a clue to problem solving. This practice had the characteristic of "re-learning communication" for research collaborators aiming to become English teachers.
　From the point of view of relational-cultural theory, it became clear that after establishing a specific relationship the research collaborators learned how to communicate, and that weakness can be turned into power.　In addition, it is thought that the introduction of school-based lesson studies inspired by "Tojisha-kenkyu" will promote communication within the school and contribute to the teacher development and collegiality of teachers throughout the school.

研究分野：教科教育学

キーワード：当事者研究　コミュニケーション　教員研修　教師の同僚性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

英語教育実習生は様々な葛藤に苦しんでいる。こういった葛藤は、実習生という立場の弱さから抑圧されがちであるが、実習生は、指導されるべき存在としてだけではなく、主体的に授業運営することが期待されている存在でもあり、直面する問題に主体的に対応する力を実習中から育てるべきだと考えられる。

困難な状況にいる人間が「当事者」として、問題状況の客観視を図り、問題解決への端緒を見出そうとする「当事者研究」は、北海道浦河の「べてるの家」での長年の実践から編み出されてきた自己探求の方法である。社会学者や哲学者による方法論の理論的基盤も整理されている研究の流れである当事者研究を教えることで、英語教員志望学生にも主体的に問題を解決する力を身に付けさせることができるのではないかと考える。

２．研究の目的

さまざまな葛藤に苦しむ英語教育実習生が、思考力・判断力・表現力を身に付け、主体性・協働性・多様性を重んじる学校づくりに参画できるようにするための「当事者研究」ができるようにするための支援のあり方についてアクション・リサーチを行う。当事者研究のやり方を学ぶことで、英語教育実習生が自己認識・主体性・自己変革の点で、どのような成長を遂げるかを明らかにすることを本研究の目的とする。

３．研究の方法

（1）介入研究：「当事者研究」の実態や原理を理解するために、研究の拠点である北海道浦河の「べてるの家」に現地取材を行い、当事者研究の多様な事例を集めるために「当事者研究全国交流会」に参加したり文献調査を行ったりする。このような取材を基に、「当事者研究」の特徴や成立要件の整理を行い、英語教員志望学生に合った当事者研究の支援方法を開発し、研究協力者に教える。

（2）当事者研究：当事者研究の原理を十分に説明した上で、英語教員志望学生に当事者研究に取り組んでもらう。研究協力者は、小グループで行うセッションと、その後の振り返りの共有というサイクルを繰り返して自己理解を深める。

（3）観察研究：当事者研究を通じての研究協力者の自己認識や変容について明らかにするために、電子掲示板に提出された振り返りをデータとして用い、分析者 3 名による分析と解釈を繰り返して、当事者研究を通じての研究協力者の自己認識・主体性・自己変革の点での成長過程と結果について考察する。

（4）理論研究：（1）～（3）の結果を総括し、当事者研究による支援のあり方についてまとめる。また、「関係性文化理論」の観点から、共同体による問題対処のコミュニケーションとして、当事者研究を再検討して、理論的な整理を行う。

（5）実践研究：（1）～（4）の成果を実践に適応する方途を考案し考察する。

４．研究成果

（1）当事者研究の支援

向谷地（2017）によると、当事者研究とは「仲間の力」「語る力」「研究の力」の三つの力を使って行う実践である。それら三つの力を、べてるの家で実践されている 15 の原則（べてるしあわせ研究所、2012）を基にして、当事者研究の原則として整理した（図１）。この図を用いて研究協力者に対して当事者研究とは何かについての講義を行い、周りの共感的理解を支えにしながら自己理解を深め、問題状況の可視化を図れるように、セッションごとにテーマを設定したり、振り返りの共有を行ったりして、当事者研究を段階的に実践できるように支援した。

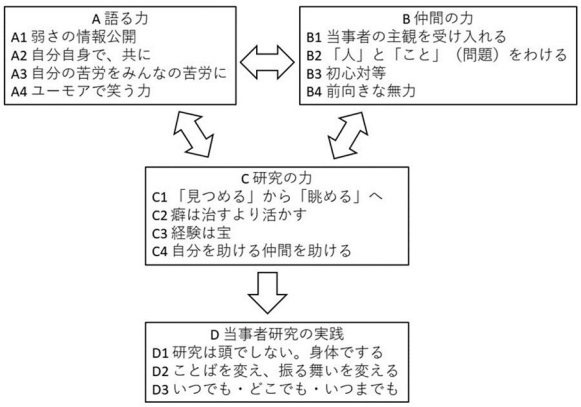

図 1 当事者研究の原則

（2）当事者研究の実践

当事者研究は異なる研究協力者によって２回実践された（以下、初年度のものを第一次当事者研究、次年度のものは第二次当事者研究とする）。研究協力者は 4 回のセッションからなる第一次当事者研究を次のように展開した。第一回：「自分の弱さと自分が抱える問題の情報公開」と

いうテーマで語り合い、その振り返りを文章化する。第二回：個人とグループで当事者研究を実践し、その振り返りを文章化する。第三回：「当事者研究は実際の学校現場で受け入れられるのか」について考えを深め「これからの不安」をテーマに個人で当事者研究を実施して報告する。

第二次当事者研究も、展開は前年度とほぼ同じであったが、相違点としては、導入時に研究者による当事者研究の実演を行ったこと、語り合いの内容を視覚化する工夫を加えたことが挙げられる。また、研究者の一人と研究力者との間に緊密な人間関係があったことも、前回との違いである。

（3）当事者研究の結果

第一次当事者研究における 4 回のセッションの振り返りを分析したところ、第一回からは「弱さの情報公開」と「役割からの解放」、第二回からは「ユーモアを伴う傾聴の力」、第三回からは「多様性の肯定」と「ヒトとコトの区別」、第四回からは「当事者研究実践の可能性」という結果が得られた。第一次当事者研究でのコミュニケーションの方法を経験した研究協力者は、次の 4 つの観点からコミュニケーションを学び直したと考えられる。それらは、コミュニケーションにおける「参加者の対等性の徹底」「権力者の自己開示の必要性」「『場』の重要性」そして「コミュニケーションの互恵性」である。

第二次当事者研究における 4 回のセッションの振り返りの分析からは、既存の人間関係とコミュニケーションの学び直し、研究協力者の「優等生」志向とバーンアウト傾向、当事者研究による「弱さの再解釈」という結果が得られた。当事者研究は自己認識を深め、自身の抱える弱さの「再解釈」を促す実践であると言える。第二次当事者研究では、優等生志向の研究協力者が援助を要請することの有用性を学び、また他人を援助することの喜びを学んだのではないかと考えられる。

当事者研究は、英語科教員を目指す学生にとって「コミュニケーションの学び直し」という特徴をもつものであり、当事者研究実践による弱さの「再解釈」を通して、「優等生志向」の強い影響下にある研究協力者の「優等生志向」には萌芽的な変化が生じることが確認された。

（4）関係性文化理論の観点からの検討

個人の特性ではなく関係性の特性に着目する「関係性文化理論」の観点から、共同体による問題対処のコミュニケーションとして当事者研究を検討した。当事者研究は、問題の外在化、経験の再解釈、当事者主権といった理念にのっとり、研究テーマの設定、経験の分かち合い、問題の分析と対処法の考案、結果の共有・発表へと展開をする。このような展開を、関係性文化理論の観点から、「互恵性」「成長を指向する関係性」「関係性レジリエンス」を引き出すコミュニケーションと概念化することで、当事者研究は特定の関係性を文化として定着させた上でのコミュニケーションであり、その関係性の文化においてコミュニケーションは弱さを力に変えることができるものと考えられる。

（5）当事者研究的な校内授業研究会

参加者の意見や考えの交流がなく、外部講師や先輩教員からの指導助言で締めくくられるような授業研究の形骸化の問題は繰り返し指摘されてきた。参加者が対等な立場で各自の実践を対象化して学び合えるような授業研究のために、弱さを共有し認識の変容をもたらす、当事者研究のコミュニケーションの在り方を導入してはどうかと考える。当事者研究的な校内授業研究会では、発表者が物語様式による通時的な報告を背景情報も含めて行い、研究への主体的関与を目指して与えられた研究テーマに自分でサブタイトルをつける。また、主催者側は、参加者全員にとって安全で安心できる場を確保し、特権的な参加者を認めず全員に共同研究当事者としての参加を求めるものとする。このような特徴は、運営方法の違いだけでなく、発表者・主催者・指導助言者・参加者の認識的な変容をもたらす。運営面及び認識面で従来のものとは大きく異なる当事者研究的な校内授業研究会は、教師の省察的な実践力を高め、同僚性を培うものである。しかしながら、校内の人的・時間的な資源が必要であるため、いきなり全面的な採択ではなく、学校内外のサークル活動のような周辺的な場所からの導入を目指すことが現実的な方法として考えられる。

＜引用文献＞

べてるしあわせ研究所（監）（2012）.『苦労を希望に変える当事者研究―理論編』東京：MC MEDIAN.

向谷地生良（2017）.「あらためて当事者研究とは、そして病院に導入し、実践するには。」『精神看護』5 月号（pp. 236-241）東京：医学書院.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 中川篤、柳瀬陽介、樫葉みつ子	４．巻 17
２．論文標題 弱さを力に変えるコミュニケーション	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語文化教育研究	６．最初と最後の頁 116-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中川篤、樫葉みつ子、柳瀬陽介	４．巻 30
２．論文標題 当事者研究が拓く、弱さを語るコミュニケーション―校内のコミュニケーションリーダーとなる英語教師を目指して―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ARELE―Annual Review of English Language Education in Japan―	６．最初と最後の頁 271-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 樫葉みつ子、中川篤、柳瀬陽介	４．巻 48
２．論文標題 卒業直前の英語科教員志望学生の当事者研究―コミュニケーションの学び直しの観点から―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国地区英語教育学会研究紀要	６．最初と最後の頁 95-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 樫葉みつ子、柳瀬陽介	４．巻 1
２．論文標題 当事者研究から考える校内授業研究のあり方	５．発行年 2020年
３．雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」	６．最初と最後の頁 105-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/50180	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中川篤、樫葉みつ子、柳瀬陽介
2．発表標題 当事者研究が拓く、弱さを語るコミュニケーション―校内のコミュニケーションリーダーとなる英語教師を目指して―
3．学会等名 全国英語教育学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 中川篤、柳瀬陽介、樫葉みつ子
2．発表標題 弱さを力に変えるコミュニケーション―関係性レジリエンスの観点から検討する当事者研究ー
3．学会等名 言語文化教育研究学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 樫葉みつ子、中川篤、柳瀬陽介
2．発表標題 卒業直前の英語科教員志望学生の当事者研究―コミュニケーションの学び直しの観点から―
3．学会等名 全国英語教育学会
4．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	柳瀬　陽介 (Yanase Yosuke) (70239820)	京都大学・国際高等教育院・教授 (14301)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関